文末音調の実験音声学的研究

——「ノダ文」における音響分析を中心に——

畑　由美子（創価大学）

要　旨

本研究ではイントネーションの機能について、合成音声を用いた聴取実験、発話実験からの音響分析の両面から分析を行った。特に「～んだ」という形式で現れるノダ文について、一般的な上昇調と疑問文との結びつきとは異なるのではないかとの仮説のもと、聴き取りと発話の二つの実験と、文の機能とを関係づけ、考察を試みた。

その結果、相手から「はい／いいえ」といった回答の要求や確認要求を行う発話において、「～んだ」形式のノダ文では、下降イントネーションが現れるということがわかった。また、文の機能の関わりとして、ピッチだけではなく、文末の持続時間長（duration）やインテンシティの関わり考えられた。

キーワード：イントネーション、下降調、ノダ文、「～んだ」、疑問文

1. 序論

一般的にイントネーションは、疑問文の場合は上昇となり、平叙文の場合は非上昇となるといわれている。ところが、杉浦（1997）において、疑問文で現れるべき場所に、「～なんだぁ」のような疑問文の形式ではない文型と、下降イントネーションとの組み合わせが現れることが指摘されている。杉浦はこれを「受け入れのイントネーション」と呼び、「消極的な受け入れ」で「その情報に発話の直前に初めて気がついた」場合に発話されると指摘している。

これに類似する例として、「いまから帰るんだ」 と発話された際、聞き手は「発話者自身が帰ることを宣言していると判断する」場合と、「話し手から帰るのかどうかを尋ねられたと判断する」場合の二つの受け取り方をすることがある。このような認識の差が起こる要因としては文末の音調差と、この文が「ノダ文」であることが関わっていることが大きいように思われる。また、杉浦の例も、ノダ文であることに注意するべきである。

そこで、本稿ではノダ文と音調との関係について、仮説を二点たて、実験・分析を行う。

1．「～んだ」という形式のノダ文においては、イントネーションの形式は一般的な認識と異なり、下降調が質問になるのではないか。
2．質問に答える形で「はい／いいえ」で返答するか、相手が帰ることを認識して応答するかの差は、文末音調が関わっているのではないか。

この二つの仮説を踏まえ、本研究では文法的な解釈を行った上で、聴き取りと発話の両面から実験を行い、実際の発話においてどのような音調の特徴がみられるのか明らかにしたい。

2. 先行研究

2.1. 先行研究と本稿との関連

本稿では「いまから帰るんだ」という文を中心に、イントネーションと疑問文との関係に着目するが、文末の形式に注目すれば、「～んだ」というノダ文の変異形が関わっていることが分かる。そこで、ノダ文についてこれまでの研究を概観してみる。

野田（1997）では、ノダ文の分類を二つに分け、文の一部を名詞化する「スコープの『の（だ）』」と、話し手や聞き手の態度を表す「ムードの『の（だ）』」に分類している。その中で「ムードの『の（だ）』」は、対事的「のだ」と対人的「のだ」に分かれ、それぞれ「関係づけ」「非関係づけ」の用法に分かれることを指摘し分類している。対事的「のだ」は聴き手の存在を前提とせず、「の」や「んです」といった聞き手を意識した形式はとらない。一方、対人的「のだ」は必ず聞き手を必要とするものであり、「の」や「んです」の形式を自然にとることができる。

また、それまで多くの「ノダ文」の研究が構文論的研究や意味論的研究であったのに対し、名嶋（2007）では、語用論的観点をもつ必要性が述べられている。名嶋（2007）は、表意レベルのノダ文の中でも、「発見のノダ文」と「説明のノダ文」の連続性について次のように述べられている。

> 「新たに登録する思考」を「聞き手側から見た解釈として」「客体化された話し手」に提示するのが「発見のノダ文」であり、すでに「登録済みの思考」を「聞き手側から見た解釈として」「他者」提示するのが「説明のノダ文」ということである。そして、その中間に「客体化された話し手」と「他者」の双方に対して提示する場合が存在すると考えられる。（p. 123）

また、名嶋（2007）は「発見のノダ文」について、「常に普通体で発話され、具体的な聞き手が存在しない場合でも発話され、常に下降イントネーションで発話されるもの」（p. 127）と考察している。

本研究で問題としている「いまから帰るんだ」という発話について言えば、聞き手が「相手（話し手）が帰る」と認識した場合、話し手は「聞き手が認識していなかった事態」を提示していることになる。つまり、野田（1997）の言葉でいう所の「対人的『のだ』」になるといえる。一方、話し手が「相手（聞き手）が帰る」ことを尋ねているとする場合、話し手が「認識していなかった事態」を把握し、その把握した内容を提示することで、疑問文として成立させている。「対事的」な形式をとりながら、対人的な機能を果たしていると考えられる。ここで起きたミスコミュニケーションの要因の一つとしては、名嶋（2007）に指摘される、「『ノダ』による提示の対象が『客体化された話し手』か『他者』か」という点に関わると考えられる。しかし、平叙文とも疑問文ともとることができるという状況において、ノダ文の研究だけで実態を解明するのは困難である。

こうした先行研究をふまえ、以下、ノダ文と音調との関係について、聴き取りと発話の両面から実験を行い、音響的側面から分析を行っていく。

3. 聴取実験

3.0. 聴取実験の目的

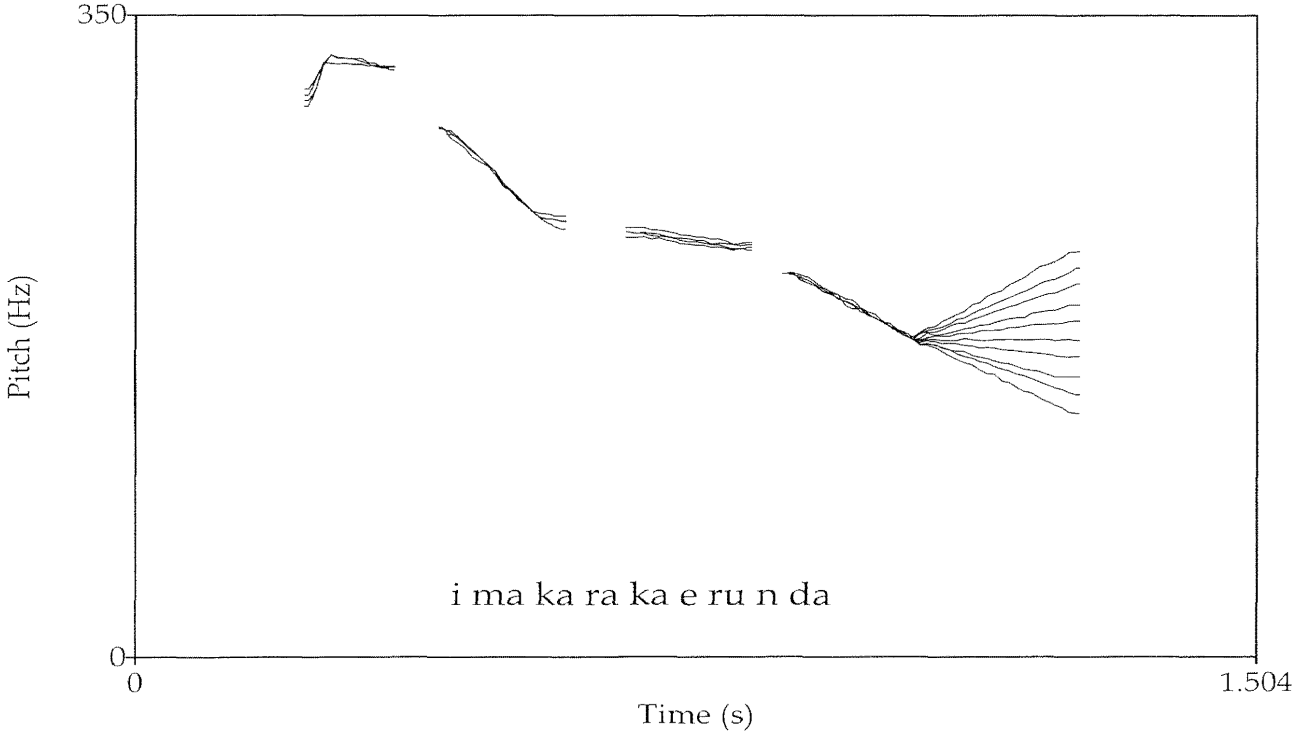
ここではイントネーションの違いにより、聞き手の認識・判断にどのような違いが出るか、合成音声を用いた聴取実験を行った。なお、合成音声の作成には、現在音声分析において主流にもなっており、合成後の音質もほとんど合成前と変わらずに再現できることから、Praat を使用した。

3.1. 方法

聴取実験の第一段階として、文末のピッチの上昇下降の度合いにより聞き手の判断にどのような影響を与えるのか、合成音声を用いた実験を行った。

まず、「いまから帰るんだ」という文を録音した後、「だ」の d 音から上下させた合成音声を作成する。d 音は 172Hz から開始し、a 音の終了点を 132Hz から 222Hz の間で 10Hz ずつ図 1 の通り上下させ、計 10 種類作成した。話者は東京出身の筆者 YH（27 歳、女性）である。

図 1　いまから帰るんだ



その後、被験者に対し作成した合成音声をランダムで聞かせ、どの答え方が当てはまるか、該当する選択肢を選んでもらう。なお、本調査は東京都八王子市の大学に通う 19 歳から 24 歳までの学生 55 名を対象[1]とした。

選択肢は以下の通りとする。

a．自分が帰るという立場で「うん、そうだよ」と答える

b．相手が帰るということを認識して「あ、そうなんだ」と聞き返す。

c．どちらともいえない。わからない。

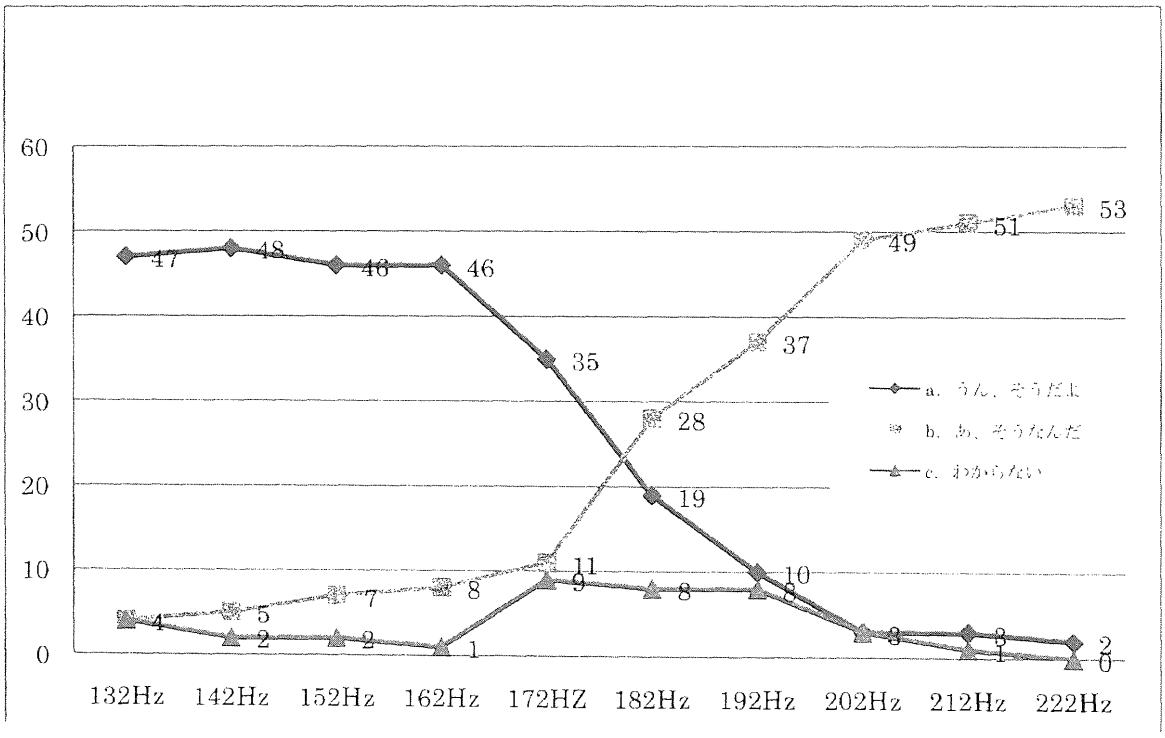
3.2.結果と考察

実験の結果、図2に示すとおり、ほぼ平調になる172Hzを基準に、a音の終了点が162Hz以下に下降する場合において、自分が帰る立場で、「相手の質問に答える」形式で応答するという回答が多くなった。反対に上昇音調、特にa音の終了点が202Hz以上になる場合には相手が帰る立場として認識され、相手の提示を聞き手が認識して応答する場合が多い。また、d音開始からの上昇の度合いが、0から20Hzの間はゆれが多くみられ、「c．わからない」という回答も多かった。

このことから「んだ」という形式で現れるノダ文の場合、上昇調ではなく、下降調の場合に疑問文として認識されていることが確かめられる。反対に上昇調の場合は疑問文ではなく、「相手が帰ることを述べている」との回答が多くなり、上昇するに従って判断のゆれも少なくなっていく。これは一般的な疑問文のイントネーションの認識とは逆の下降調が疑問、上昇が述べたてというパターンになる。

こうした結果をふまえ、以下では発話者の立場から、意図がどのように音調に現れるか、発話実験から分析を行う。

図 2　聴取実験　回答分布



4. 発話実験

4.1. 発話実験：方法

ここでは、実際に話し手が何らかの意図を持って発話を行う際、現れる音調の差がどのような実態なのかという点に着目し、発話実験の分析を行う。また、調査にあたって、以下の3つの場面を想定した。

1．場面の設定を与えての短文発話。(以下、短文発話)
2．映画の台本から一場面を切りだし演技をして読んでもらう。　(以下、場面演技)
3．談話等、自然発話。(以下、自然会話)

短文発話は、場面や感情の設定を与えることにより、発話の意図がどのように音調に現れるのかを目的としたものである。それに対し、場面演技では先行の発話を受け、それをどのように解釈し反応するのかを観察する。文脈的な解釈と、音調の実態の両方を観察していく。「短文発話」と違い、感情表現や読み方の指定をしないため、より自然な内省を再現できると考えられる。

上の二つとは違い、自然発話では、場面も台詞も与えずに自然な会話を録音していく。雑音等の影響で詳細な分析は期待できないが、より自然な形で「～んだ」形式のノダ文を観察できると期待する。

また、本研究では方言の影響を避けるため、インフォーマントを東京方言話者4名に限定し、調査を行った。

表1　インフォーマント情報

インフォーマント	年齢	性別
HK	28歳	女性
YM	20歳	男性
HU	26歳	女性
KH	29歳	男性

収録方法について、短文発話、場面演技の際はヘッドセットマイクを使用しモノラル録音を行い、自然会話においてはできる限り発話者の緊張や精神的負担を減らすため、IC レコーダー（zoom H1）を机の上に置き、ステレオ録音で行った。その後、録音した音声を、Praat を使用し音響的特徴の分析を行った。

4.2. 短文発話

4.2.1. 短文発話：方法

ここでは話し手が意識的に何かを意図して発話した際、音調にどのような特徴がみられるのかという点に着目して調査を行う。試験文を5種類用意し、それぞれ6つの場面に応じて発話してもらいどのような特徴が観察されるか分析を行う。

表 2　試験文と発話パターン

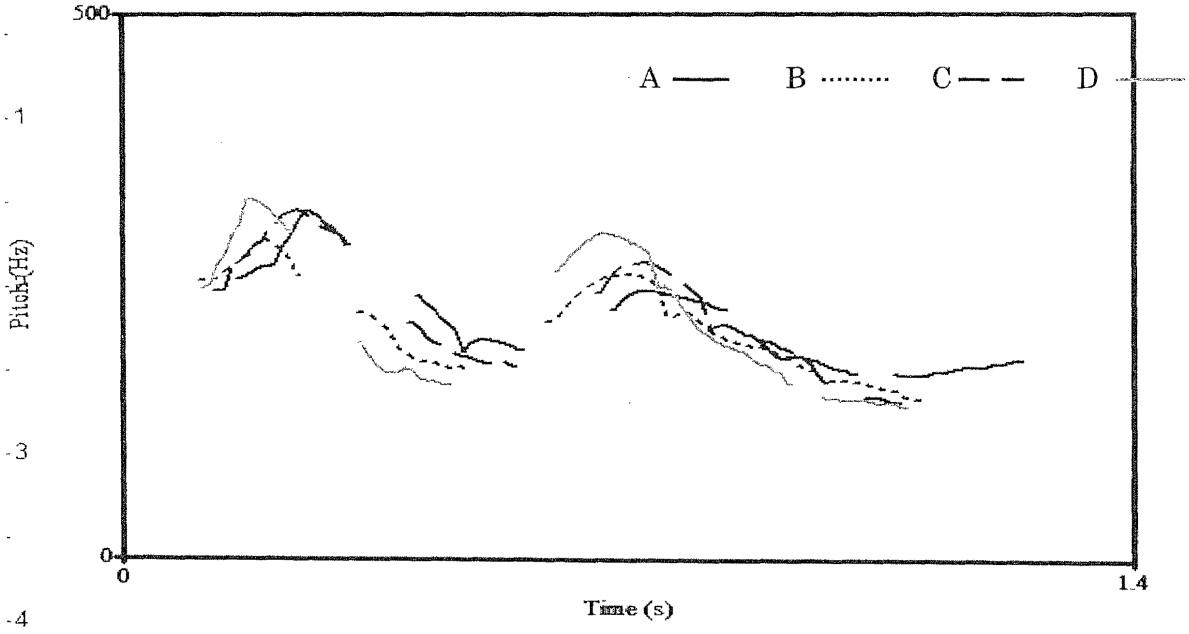
試験文	発話パターン
1. いまから帰るんだ 2. いまから帰るんです 3. いまから帰るの 4. ごはん食べたんだ 5. ごはん食べるの	A：相手に告げるように B：相手に尋ねるように C：命令するように（試験文４の際はこの項目は除く） D：相手を責めるように E：（相手の状況について）残念そうに F：（自分の状況について）残念そうに

4.2.2. 短文発話：結果

短文発話の結果については、「個人の内省における同じ文での意図のパターン比較」「インフォーマント同士の比較」「異なった文における同じ意図での発話の比較」の三つの観点から比較し、分析を行った。

個人の内省における同じ文での意図のパターン比較では、同じ文で意図の違いによる音調パターンの違いを、インフォーマント個人の内省について、図３の通り比較を行った。ここでは、特に波形が明瞭に現れた HK に即して考察を行う。ピッチの上昇・下降の度合いのみに注目し比較を行ったところ、A の「相手に告げるように」発話した場合を除き、程度の差はあるが、文末に向かうに従いピッチ曲線が下降を示した。B の「尋ねるように」発話した場合においても、下降しているのが確認できる。

図 3　「いまから帰るんだ」A,B,C,D 比較（インフォーマント：HK）



また、田野村（1990）で「普通体の疑問文と言っても、眼前の相手を非難したり難詰したりする場合に限られ、しかも文末音調は必ず降調になる」(p. 68, 注）と指摘された通り、「C. 命令するように」「D. 相手を責めるように」の発話においての下降が見られる。しかし、B のように非難や難詰といった意図のない疑問文でも下降がみられるため、田野村の指摘する、「眼前の相手を非難したり難詰したりする場合に限られ」るわけではないことがわかる。

図 4 いまから帰るんだ　A. 告げるように

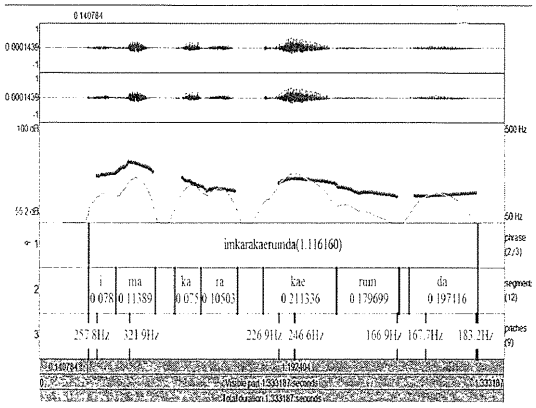


図 5 いまから帰るんだ　B. 尋ねるように

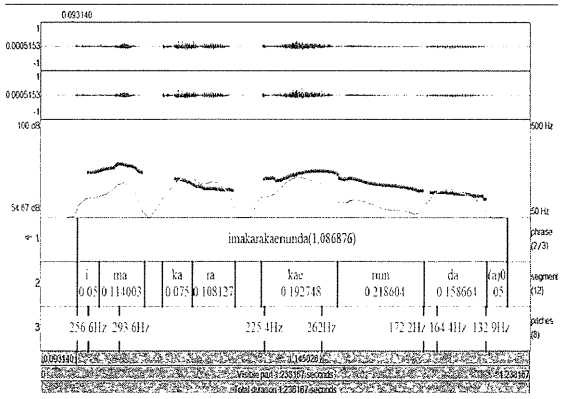


図 6 いまから帰るんだ C. 命令するように

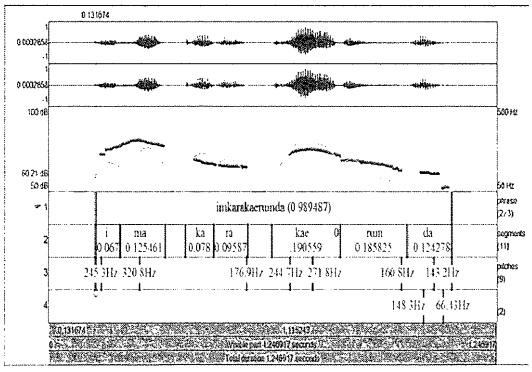


図 7　いまから帰るんだ　D. 責めるように

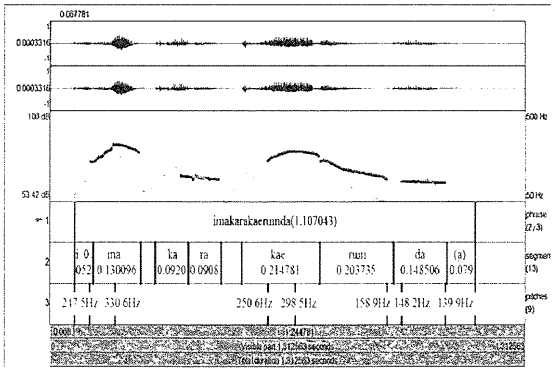


図 4～7　「いまから帰るんだ」音響分析比較 [2]（インフォーマント：HK）

図 8　「いまから帰るんだ」E, F 比較（HK）

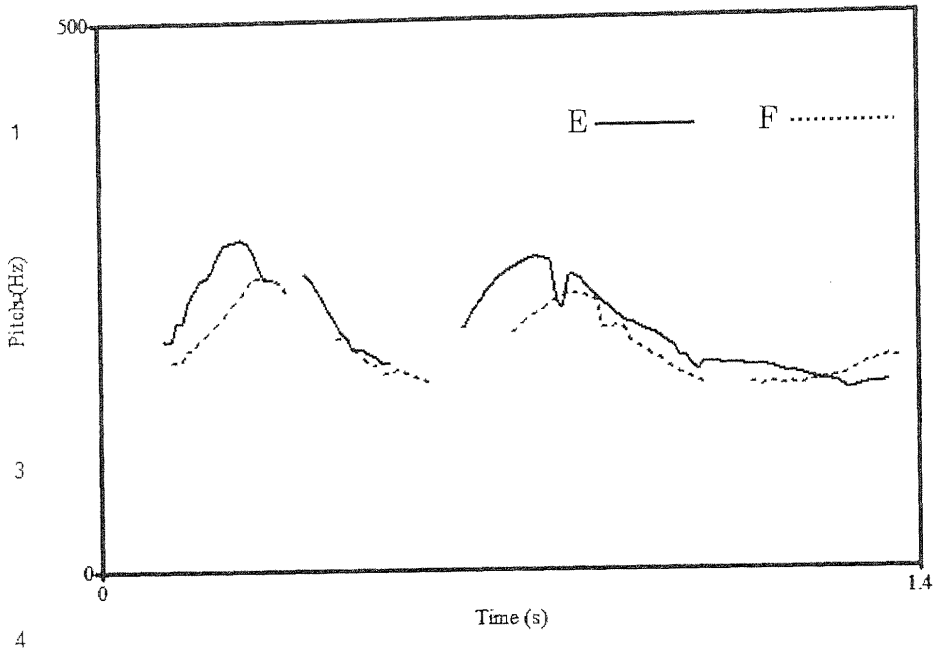


図 4 及び図 8 の二つの比較曲線から、A と F の発話では文末のピッチの上昇がみられ B, C, D, E の発話ではピッチが下降傾向にあることが分かる。このことから「んだ」形式のノダ文においては、話し手が自分の状態について述べるときは文末が上昇し、聞き手の領域に関することについては文末が下降していると考えられる。しかしながら、「C. 命令するように」いう発話に関しては、必ずしも下降調で発話されるとは限らない。

さらに、個人のレベルだけではなく、他のインフォーマント同士比較を行う必要がある。表 4 は「いまから帰るんだ」の［da］節におけるピッチの上昇、下降の差を比較し、示したものである。この数値の算出方法は、まず、［da］において、最初に現れる山場（最高値（maximum pitch）または最低値（minimum pitch））と、そこから上昇または下降したピッチの山場を測定する。それぞれの数値の測定後、二回目の山場の数値から、一回目の山場の数値を引いて、数値がプラスであれば上昇していることを表し、マイナスであれば下降を表す。この表から「～んだ」形式のノダ文では、命令の際に上昇調と下降調の両方が観察されることが分かる。

また表 5 は、［da］音の持続時間長について、インフォーマントごとの比較を示したものである。これを見ると、「C. 命令する」発話の際に、他の発話に比べ持続時間が短くなっていることがわかる。

表 3　［da］の高低差（単位：Hz）

	A	B	C	D	E	F
HK	15.5	-31.5	-76.77	-8.3	-18.2	26.9
HU	62.1	-25.2	-150.5	-88.98	100.78	35.9
YM	8.42	-7.42	14.87	-16.92	-17.52	8.9
KH	6.7	-28.64	146.1	-0.97	-38.79	9.1

この表と「～んだ」形式のノダ文における「命令」はピッチの高低差のほかに、持続時間長が関わっていると考えられる。

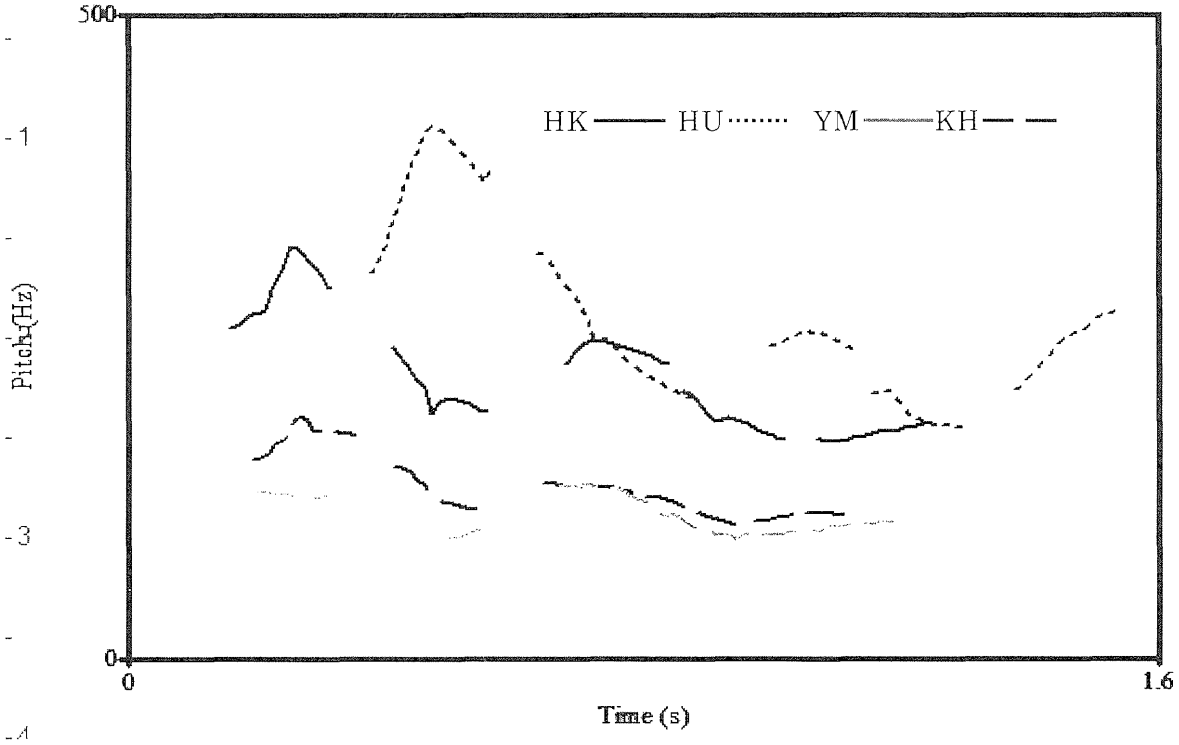
その上で、疑問や命令といった相手に何らかの働きかけを行う場合の差異については、文全体の音調や、インテンシティの違い等に現れていると考えられるが、その点については今後の課題としたい。

表 4　[da]の持続時間長（duration）（秒）

	A	B	C	D	E	F
HK	0.197	0.208	0.124	0.227	0.321	0.283
HU	0.280	0.223	0.154	0.279	0.440	0.358
YM	0.193	0.232	0.144	0.273	0.264	0.242
KH	0.187	0.207	0.165	0.176	0.350	0.245

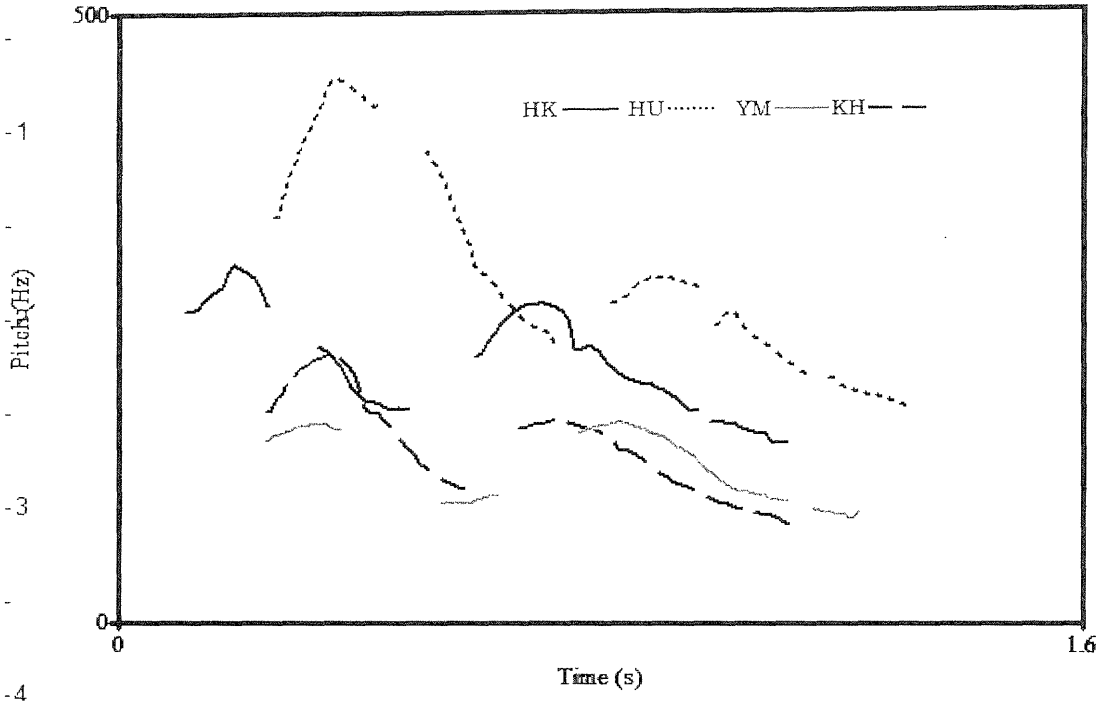
図 9 はインフォーマントの四人のピッチ曲線を並べて比較したものである。

図 9　「いまから帰るんだ」(A)　ピッチ曲線の比較



上昇の度合いや全体のピッチの波に個人差はあるものの、「相手に伝える」という発話において、文末音調の上昇がみられる。

図 10　「いまから帰るんだ」B　ピッチ曲線の比較



これに対し、図 10 のピッチ曲線から、相手に質問をする場合では文末にむかってピッチが下降していることが確認できる。このように「今から帰るんだ」という文では、上昇調ではなく、下降調が疑問文になるということがいえる。

4.3. 場面演技

4.3.1. 方法

ここでは脚本を用いて発話実験を行った。感情や発話の意図の指定をせず、インフォーマント自身の判断で、会話の流れの中での文脈や感情等を捉えて発話してもらい、そこからどのような特徴が音調に現れるか観察を行った。分析対象はいずれの場面にも、「～んだ」形式が現れ、且つ、「ね」や「よ」といった終助詞や「～んだって」「～んだっけ」のような接続のないものに限定した。

4.3.2. 結果

以下の場面では、相手に問いかける発話において、4 人中 3 人が下降しているが、ピッチ曲線を見ると、その様相が統一的ではないように見える。なお、分析の対象を明確にするため、各場面における分析対象の文に太字、下線については下線、太字で記す。

①中学生の友人同士の会話（『まぶだち』）

人物設定：神津サダトモ

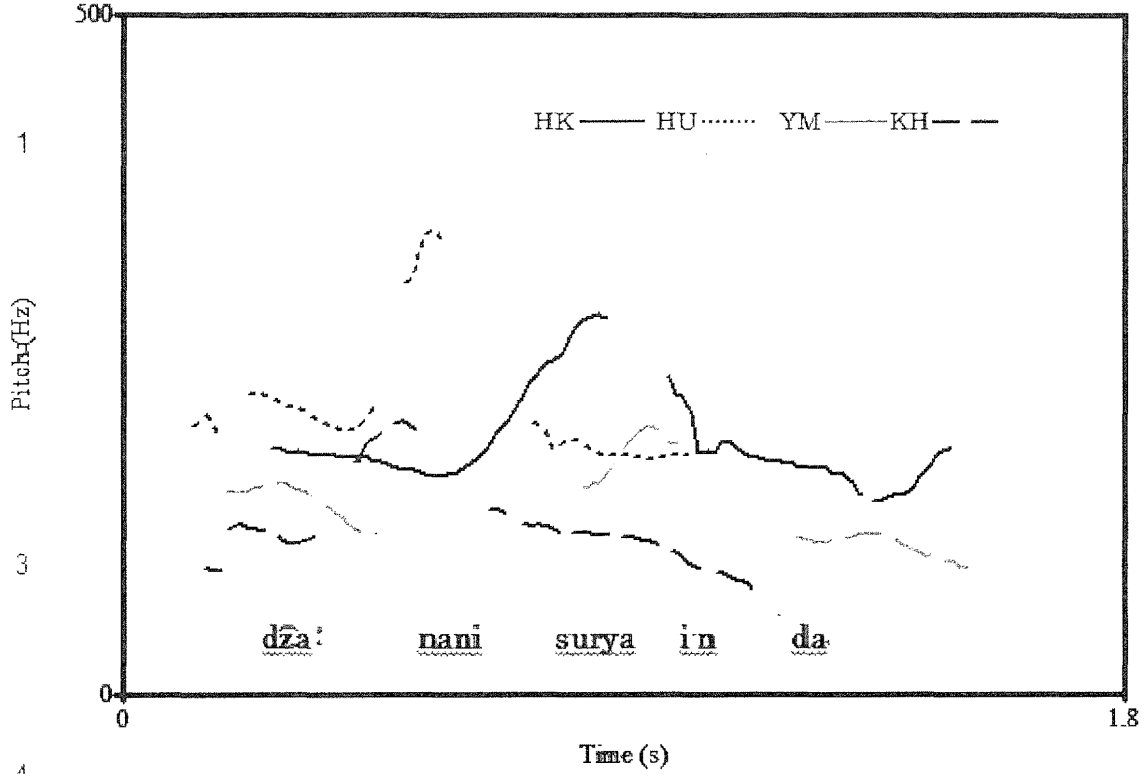
二村テツヤ　ともに中学二年生の少年

サダトモ「でも小林の言う一人前になる方法は、一個も正しいとは思えない。全部嘘だ」

テツヤ「じゃあ、何すりゃいいんだ？」

サダトモ「それがさ、分かんねーんだよ」

図 11 「じゃあ、何すりゃいいんだ？」



さらに、文末の「(いい) んだ」[3] のピッチの変化に注目して、分析したものを以下の表 6 の通りに示す。また、各列について、次のように示す。

インフォーマント：インフォーマントのイニシャル。

i:n 1 (Hz) / i:n 2 (Hz) /da 1 (Hz) / da 2 (Hz)：[i:n] [da] のそれぞれの節におけるピッチの最高値 (maximum pitch) または最低値 (minimum pitch) の値。1 では最初に現れる山場 (最高値 (maximum pitch) または最低値 (minimum pitch)) を表し、そこから上昇または下降したピッチの山場を 2 とする。1 から 2 にかけて、「最高値から最低値」というように下降しているのか、反対に「最低値から最高値」というように上昇しているのかを観察できる。

[da] の高低差 (Hz)：da 1 から da 2 までの高低差を表す。da 2 から da 1 を引いて、数値がプラスであれば上昇していることを表し、マイナスであれば下降を表す。

表5　文末「(いい) んだ」のピッチの変化

インフォーマント	i'n 1 (Hz)	i'n 2 (Hz)	da 1 (Hz)	da 2 (Hz)	[da] の高低差 (Hz)
HK	173.5	147.6	141.6	180.5	38.9
HU[4]	177.5	166.9	81.98	76.71	-5.18
YM	118.1	104.4	104.4(=i'n2)	92.97	-11.43
KH	117.9	93.27	93.27(=i'n2)	80.31	-12.96

この文脈は、情報的に多義的な解釈が可能になり、統一した結果が出ない文」であると考えられる。人によって解釈が異なるということは、脚本家の意図とは違う解釈がされているということである。文章だけでは印象が異なるため、ディスコミュニケーションを起こしやすくなると考えられる。

4.4. 自然会話の分析

これまでの実験をふまえ、実際の会話の中でノダ文がどのように現れているのか観察を行う。この実験により、より自然な状態を観察することができると望まれるため、これまでの実験を裏付ける証拠になることを狙いとする。録音の際の会話は被験者と筆者 (YH) との一対一、もしくは被験者以外の一名を交えてのグループ会話形式をとった。

以下、比較的明瞭にピッチ曲線の観察できる一例をあげる。ここではYHの発話に対し、HKは換言の提示で問い返しを行い、それに対してYHが応答するという会話になっている。

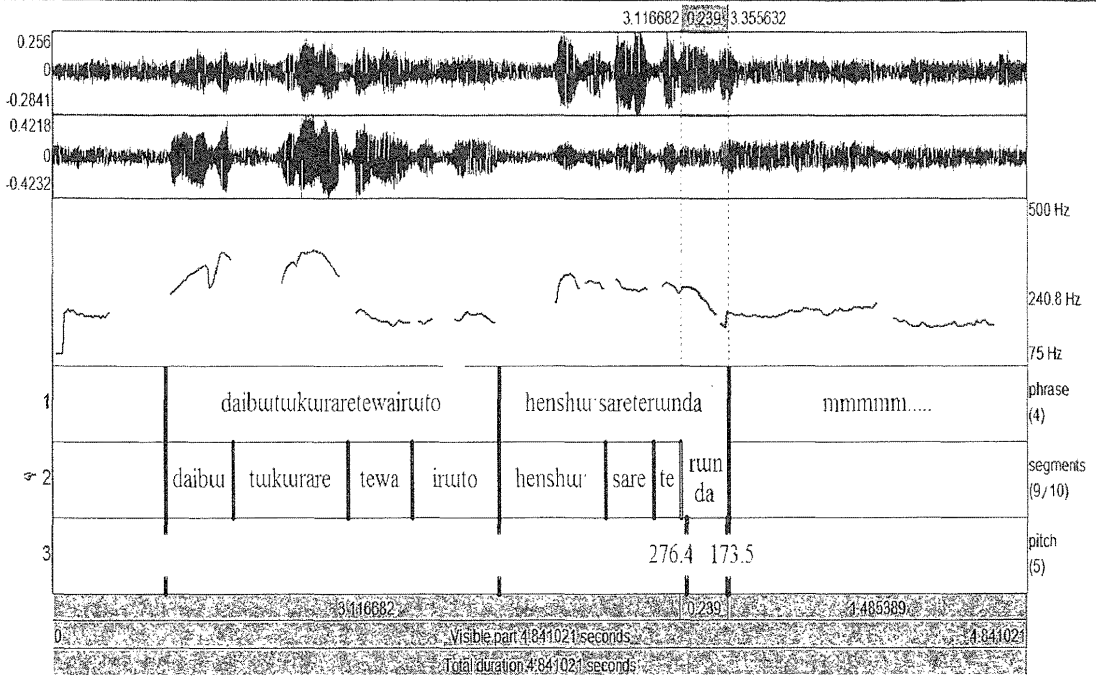
雑誌のインタビュー記事がどの程度自然な会話か、という議論について

YH：(雑誌の記事の会話は) だいぶ作られてはいると

HK：編集されてるんだ

YH：うーん・・・

図 12　雑誌のインタビュー記事の文体についての会話（HK）



ピッチ曲線を見てみると、HK の問い返しの文末において、明示的なピッチの下降が観察される。自然会話においても、相手に問い返す際にノダ文と下降調とが結びついていることがわかる。

4.5. 発話実験まとめ

以上これまでの発話実験から、「～んだ」形式のノダ文において、質問文は下降調で現れることが明らかになった。場面発話では、発話の意図を意識して発話したもらうため、誇張される可能性があるが、自然会話ではほぼ無意識的に発せられた音調である。

また、「２．場面演技」の発話より、同じ文脈でも異なった解釈がされ得ることが明らかとなった。つまり、作者の意図とは異なった解釈をされ得るということであり、文脈だけは発話の機能を完全には捉えきれないということがいえよう。

5. まとめ

以上、文末の音調について、「～んだ」という形式のノダ文においては、下降調が質問になるのではないかとう仮説のもと、聴き取りと発話の両面から考察を行った。その結果、次のことが明らかとなった。

1．「～んだ」という形式のノダ文においては、イントネーションの形式は一般的な認識と異なり、上昇調ではなく下降調が質問の機能を果たす。
2．質問に答える形で「はい／いいえ」で返答するか、相手が帰ることを認識して応答するかの差は、イントネーションのピッチの差以外に、デュレーションが関わる。

聴き取り・発話の二つの実験と、文の機能とを関係づけ、ノダ文の疑問文について再度検討した結果、相手から「はい／いいえ」といった回答の要求や確認要求を行う発話において、「～んだ」形式のノダ文では、下降イントネーションが現れるということが言える。

しかし、下降調で現れればすべてが「質問になる」とはいえない。発話実験において、相手に命令する場合と相手を責める場合にも下降調が現れた通り、質問の機能がないときにおいても同じように下降調は出現した。つまり、イントネーションにおけるピッチの高低差だけが、文の機能を担っているとはいえず、文末の持続時間長（duration）やインテンシティの関わりが考えられる。

今後の課題として、ピッチ以外の詳細な音響分析が残されている。本稿では音調の研究に的を絞ったため、そこまでには至らなかったが、詳細な音響分析を行うことにより、より客観的なデータに基づく研究が期待される。他にも、発話者の内省と実際に現れる音調との関係性といった点に関しても、今後の課題となる。

また、音調と発話機能論との結び付きも大変興味深いものである。本研究での発話実験の4.3でも述べたように、同じ文脈において、ピッチの様相、持続時間長、インテンシティなどが、異なるということが起こった。同じ文脈において、様々な発話の仕方が現れたということは、異なった認識が行われていたからであると言えよう。文脈からの発話機能の理論的枠組に加え、音調の特性を関連させることで、言葉の機能や本質がより明確になってくるものと期待できる。

注

(1) 近年、五十嵐（2010）や木部（2010a, b）等の研究で、イントネーションにも方言による違いがあると指摘されている。聴き取り調査を行う際、そうした出身地の違いによる影響を考慮し、調査を行った。なお、今回の調査では、出身地による大きな回答の違いは現れなかった。

(2) Praatによる音響分析の結果より、一番上の2段については音声の強さを表す。ステレオ録音を行ったため、左右それぞれのレベルが表示される。3段目については、ピッチ曲線とインテンシティ曲線が表示される。4段目以降はTextGridを用い、作成した。上から発話テキスト、音節ごとの時間、音節中のピッチの最高値と最低値を表示する。

(3)「『んだ』形式のノダ文の文末」でいえば、分析の対象は「んだ」のみにするべきであろう。しかし、N音は持続時間長が短い場合、ピッチが観測されにくくなる。そのため、「た［ta］」の音から観察し、［tan］［da］の二つの節のピッチの現れ方を観察していく。

(4) 2-1-2のYM同様、HUの発話において、初期設定のピッチ抽出値では、［da］のピッチが表示されなかった。そこで、［Voiced/unvoiced cost］の値を0.14→0.01　に変更してピッチの抽出を行い、ここで抽出されたピッチポイントを採用することとした。

参考文献

五十嵐陽介（2010）「統語論における枝分かれ構造は韻律にどのように反映されるのか？―近畿方言と東京方言の場合―」　第24回日本音声学会全国大会予稿集

木部暢子（2010a）「イントネーションの地域差―質問文のイントネーション―」小林隆・篠崎

晃一 編『方言の発見—知られざる地域差を知る』ひつじ書房
———（2010b）「日本語諸方言の疑問文のイントネーション」第 24 回日本音声学会全国大会予稿集
金田一春彦（1967）『日本語音韻の研究』東京堂出版
郡史郎（2003）「イントネーション」上野善道編『朝倉日本語講座 3　音声・音韻』朝倉書店
城生佰太郎（2007）「イントネーション」飛田良文・遠藤好英・加藤正信他編『日本語学研究辞典』明治書院
杉浦滋子（1997）「『～なんだア』の機能と成り立ち」『東京大学言語学論集』第 16 号　129-152
杉藤美代子（2001）「終助詞『ね』の意味・機能とイントネーション」　音声文法研究会編『文法と音声Ⅲ』くろしお出版
田野村忠温（1990）『現代日本語の文法 I 「のだ」の意味と用法』　和泉選書
仁田義雄（1987）「日本語疑問表現の諸相」『言語学の視界』大学書林
———（1991）『日本語のモダリティと人称』（増補, 1999）　ひつじ書房
仁田義雄他（2003）「説明のモダリティ」　日本語記述文法研究会編『現代日本語文法 4　第 8 部モダリティ』くろしお出版
轟木靖子（1993）「東京語の文末詞の音調と機能について」　大阪外国語大学修士論文
名嶋義直（2007）『ノダの意味・機能—関連性理論の観点から—』くろしお出版
野田春美（1997）『「の（だ）」の機能』　くろしお出版
蓮沼昭子（1995）「対話における確認行為『だろう』『じゃないか』『よね』の確認用法」仁田義雄編『複文の研究（下）』くろしお出版
森川正博（2009）『疑問文と『ダ』—統語・音・意味と談話の関係を見据えて—』（ひつじ研究叢書〈言語編〉第 81 巻）　ひつじ書房
山岡政紀（2008）『発話機能論』くろしお出版
山岡政紀・牧原功・小野正樹（2010）『コミュニケーションと配慮表現　日本語語用論入門』明治書院
渡辺実（1971）『国語構文論』塙書房
Jakobson,R （1976）: *Six leçons sur le son et le sens,* préface de Claude Lévi-Strauss, Les Editions de Minuit(coll "Arguments")　（邦訳：花輪光訳（1977）『音と意味についての六章』みすず書房）
Halliday, M.A.K.（1994）*An introduction to Functional Glammar. 2nd ed.* Edward Arnold.（邦訳：山口昇・筧寿雄訳（2001）『機能文法概説—ハリデー理論への誘い—』くろしお出版）

用例出典

1 シナリオ作家協会編（2002）『’01 年鑑代表シナリオ集（映人社）』より　古厩智之脚本「まぶだち」

（畑由美子、創価大学教育・学習活動支援センター助教、yhata@soka.ac.jp）